

授業実践を出発点とした中級作文教材の開発

木戸 光子 杉浦 千里

要 旨

中級入門期の学習者を対象とする作文授業から出発した教材開発について、教材開発の動機、および、授業実践の中で行ってきた教材開発の経緯を報告する。作文を苦手とする学習者が作文を楽しむという活動を通して作文を好きになり、意欲的かつ主体的に作文に取り組めるように考えて教材開発を行った。「楽しむ」活動では、協働学習によって他者とともにアイデアを出し合い、アウトライン作成、作文ルール理解、学習者同士の作文フィードバックを行うようにした。これらの活動の前提として、作文授業の場で学習者同士が自分の意見を率直に出し合い、異なる意見も尊重し合うという「学習の安心保障」が確保されていることが重要である。

【キーワード】 教材開発 作文 中級日本語 協働学習 学習の安心保障

Development of Intermediate Japanese Writing Materials Originating in a Composition Class

KIDO Mitsuko, SUGIURA Chisato

【Abstract】 This paper describes the motivations for the development of teaching materials for use in Japanese composition classes for beginning intermediate learners, as well as the process of their development. The purpose of these materials is to encourage learners who are not proficient in writing to develop their skills while having fun in the process. Using “enjoyment” activities, the learners work in collaboration with each other to come up with ideas, create an outline, understand the rules of composition writing, and provide feedback to each other through collaborative learning. As a precondition for these activities, it is important to ensure that learners are able to express their opinions openly in the composition writing class and show respect for each other's differing opinions.

【Keywords】 Development of teaching materials, composition writing, intermediate Japanese, collaborative learning, security in learning

1. はじめに

本稿の目的は、中級レベルの作文授業という教育実践を通して行った作文教材開発について、教材開発の過程と意義を報告することである。教材開発では、主に、授業での教育実践の必要性に応じて教材を作成する場合、および、コーパス等のデータや作文に関する理論に基づいて教材を作成する場合が見られる。授業での教育実践を出発点とする教材開発では、授業実践を通して得られた教師の経験に基づき、学習者に必要な教材を作成する。一方、データや理論を出発点とする教材開発では、研究によって得られたデータ分析の成果や学習理論に基づいて設計された知見を活用して教材を作成する。

本稿で取り上げるのは、教育実践を出発点とした教材開発である。教材開発を行った大学の日本語コースの授業は中級入門期の学習者を対象とし、1学期10週の週1回75分授業を行い、400字程度の作文を普通体で書くことを目標としたものである。教材開発を始めた2016年度は杉浦が担当した。2017年度は木戸が担当し、同教材を使用した。2018年度、2019年度は両者が担当し、2020年度は杉浦と他教員が担当した。この授業において自作教材を開発し、さらに4年間授業で使用しながら改訂を重ねて中級作文教材として出版した過程から得られた教材開発の知見をまとめる。この報告を通して、教材開発の動機や学習者の抱える問題、学習内容、学習方法など教材開発に関わる要因を検討し、教育実践から出発した教材開発のあり方を考察する。

2. 教材開発の動機

「授業」という集団の中で、「作文」という個人的行為の側面が強い活動をどのように行えば学習者と教師双方が満足のいく時間を共有できるのか。本教材開発はこれを考えることから始まった。学習者の視点からは「何を学びたいのか」「阻害する要因は何か」を考える必要がある。それを支える教師の視点からは「何を、どのように教えるのか」を考える必要がある。

2.1 何を学びたいのか 阻害する要因は何か

教材開発の前に元・中級学習者へのヒアリングを行った。中級レベル当時を思い出してもらい、作文についての意見を聞いた。「何について書きたいか」という問いには「何でもいい」「先生が決めたことを書く」という答えが多かった。掘り下げて聞くと、中級レベルではレポートや研究計画書など、本来書きたいことはまだ書けないから何でもいいのだという。また、作文が嫌い/苦手だった要因として、「題がつまらない」「同じ題で何度も書かされる」ことが挙げられた。興味がないから言いたいことがない、考えることが苦痛になるという。また、「書き方がわからない」という意見もあった。「日本語で何をどの順番でどう書けばいいのかわからない」、「どんな表現が適切なのか判断できな

い」という声もあった。「考えることが面倒、時間がかかりすぎる」という意見も出された。

ここから「興味の持てる題」「レポート・論文作成につながる内容」「考えることを楽しめる活動」「作文の形式の提示」の4つが課題として浮かび上がってきた。

2.2 何をどのように教えるのか

次に教師の視点から考えたい。「初級」であれば、学んだ文法項目や語彙を使って短文作成を行うことで学習成果を確認しやすい。また、「上級」ではレポート作成や研究計画書など明確な「書く」目標がある。しかし、その間にあたる「中級」では、何をどの順番でどのように教えればよいのか、指針がない。そこで本作業を通じてその指針を探ることにした。ここでいう指針とは「～ができる」という抽象的なものではなく、10回分の授業で実際に使う教科書という具体物を作ることを指す。毎回の授業にどのような作文を書くことを目標として活動を行うのかを具体的に記述し、それらが10回のコース全体でどのような関連を持って学習者の書く力を伸ばすことにつながるのかが一望できることを目指した。一つ一つの作文/授業が別個のものとして存在するのではなく、一つの有機的な成長体であること、また、学習の全体像が学習者にも明らかであることが有効だと考えるからである。

ここまでのことを踏まえて、「教材」と「授業」の方針を次のように決めた。

- 作文の題は、学習者がそれについて「考える」意義を感じられるものにする。ただし、中級レベルの日本語で表現できるものを選ぶ。
- その題について授業の中で気楽におしゃべりできる時間を大幅にとる。
- 気軽におしゃべりできる学習者間の関係構築に配慮する。
- おしゃべりが作文に結びつくように、明確なアウトラインを提示する
- それぞれの作文に必要な語彙・文法・表現を提示する。
- 添削の手法を確立する。
- 添削とフィードバックが作文改善に役立つことを目指す。個人/個別に閉じるのではなく、授業で共有する。

3. 教材開発の経緯

以上のような趣旨で、2016年度より中級作文授業の使用教材の開発を行ってきた。教材開発を行った授業は、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター開講の補講日本語コース4レベル「書く」で、大学院生と研究生を対象に、1学期10週完結、75分授業10回である。春・秋学期と年2回同じ日本語レベルで同じ内容の授業が開講され、同じ学期に木曜1限と3限の2つの授業が同時期に行われる。なお、受講者数は

1 クラス 5 ～ 25 人程度だった。

以下、2016 年度から 2020 年度の教材開発の経緯を報告する。

3. 1 自作教材の作成 2016 年度

2 章のような思考を経て、2016 年度春学期には教材の骨格が完成した。10 回の授業の内容を表 1 に示す。

表 1 2016 年度春学期の授業スケジュールと内容（シラバスより転載）

回	授業内容	内容の説明 【作文の種類・目的】
1	オリエンテーション レベルチェック作文 初回アンケート	
2	作文①「私を表す漢字」 作文ルール①「です・ます体」ではなく「普通体」で書く	・漢字一字を選んで自分を表現する。 ・クラスメイトを知る。 【自己紹介の作文】
3	宿題 F B 作文②「私のおすすめ」 作文ルール②「話し言葉」ではなく「書き言葉」で書く	・「おすすめのレストラン」「元気が出ないときにおすすめの場所」「小確幸」（村上春樹の小説から）の 3 つから 1 つを選んで書く。 【説明する】
4	宿題 F B 作文③「留学の準備」 作文ルール③原稿用紙の使い方 作文ルール④接続詞を使う 指示語を使う	・留学という共通体験について話し合う。苦労したこと / 面白かったことを共有する。 【順番に気をつけて書く】 【書く形式を知る】
5	宿題 F B 作文④「習慣の違い」 作文ルール⑤ アウトライン（構成）を考える 一段落・中心文・支持文	・違う考え方を知る。 ・意見を主張する。 【比較する】 【中心文と指示文を明確に書く】
6	宿題 F B 作文⑤「男が得か、女が得か」 作文ルール⑥意見を考える練習	・みんなのできるだけたくさんアイデアを出す。 【理由と具体例を述べる】 【客観的に書く】
7	宿題 F B 作文⑥「グラフを読む」 作文ルール⑦グラフを説明する表現 ⑧意見を述べる表現 作文集を作ろう	・グラフへの苦手意識をなくすため、自分自身についてグラフにして説明してみる。「日本語の力の変化」「私の頭の中」 【グラフの表現を知る】
8	宿題 F B 作文⑥「グラフを読む」 作文集を作ろう	・複雑なグラフを読み解く。それについて意見を述べる。 【意見述べの表現を使う】
9	復習 テスト練習 作文集を作ろう	・話し言葉を書き言葉に変える練習をする。 ・作文集に載せるものを選ぶことで、作文の総復習をする。
10	期末テスト 作文集配布	・テストで学習成果を確認する。 ・他の人の作文も読んで楽しむ。

※ FB はフィードバックの略。

(1) 授業の進め方

概ね次のような順番で授業を進めた。

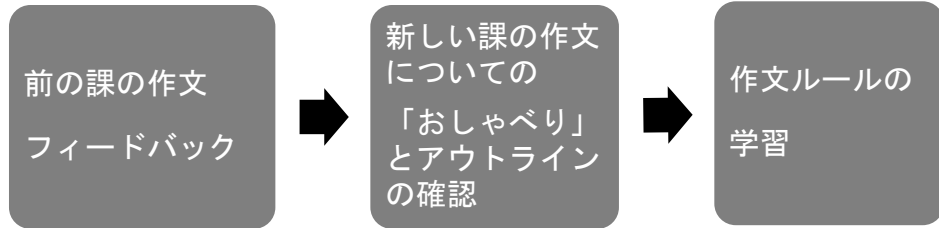


図1 1回の授業の流れ

授業では、新しい課に入る前に、学習者は教師から添削された作文を返される。学習者は添削記号を参考にチェックする。ペアで前の課の作文をお互いに読み合って内容確認や質疑応答を行う。わからないことがあれば教師に質問する。前の課の作文のフィードバックが終わったら、新しい課の学習に入る。まず、アイデア探しの導入としてサクさんとブンさんの会話をペアで読み合う。次に、作文テーマに関する質問についてお互いにおしゃべりしながらアイデアを出し合う。それから、アウトラインを参考にアイデアを作文の構成に整えた形にしていく。さらに、その課の作文に必要な作文ルールを学び、アウトラインに基づいて作文を完成させる。

(2) 初期の自作教材の特徴

教材作成にあたり、内容重視を中心に据えた。書きたいことが思い浮かばずに苦しんだというヒアリングの結果に対処するため、授業ではできるだけ楽しく「おしゃべり」できるように心がけた。「おしゃべり」を促進する鍵は設問にある。例えば5課の「習慣の違い」では「ハグをするか、しないか」についておしゃべりをする。この設問から、ハグ文化圏の学習者はそれがどんなにいいことか、心に潤いをもたらすかを力説し、日本でそれができないことを嘆く。非ハグ文化圏の学習者は親とハグする気恥ずかしさを話し、そこからお互いの親子の愛情表現の違いについて話が広がっていくということが予測（期待）される。異なる文化背景を持つ留学生の集団である強みを、どのようにしたら発揮でき、作文につなげることができるかを、教師自身の体験も基に熟考し10の設問を用意した。この作成には相当な時間と集中力、発想力が求められる。

さらに、おしゃべりで生まれたアイデアを作文化する際のアウトラインもできるだけ単純なものにし、書くことの負担を減らすように工夫した。アウトラインを指定することは、添削作業の軽減にもつながった。学習者が思いついたことを書き連ね、その解

読に教師が呻吟するということが避けられる。反面、表現形式の提示が不十分だった。または、提示するだけでそれを定着させるための練習問題が準備できなかった。そのため、次年度以降、作文ルール的大幅な加筆修正を行った。

3.2 教材の使用報告 2017年度

2017年度の授業では、2016年度の教材をそのまま使用し、必要に応じて補助教材で説明を補った。また、フィードバックは2017年度とは一部異なる方法で行った。さらに、作文集の作成に Google Form を活用し、手書きではなくキーボード入力での作文提出とした。

授業では協働学習が円滑に行える利点を活かして、ペア学習やグループ学習を主体とした。教材どおりに授業を行っていけば、そのまま協働学習が進められた。一方で、各課の課題作文を書くためのアウトライン（構成）に最低限必要な言語表現の知識と運用が不足している場合もあった。そこで、主に以下の課題作文で補足説明をした。

表1の作文③「留学の準備」において、列挙の接続表現について、石黒（2005）を参考に、「まず」「次に」等の接続表現と、「第一に」「第二に」等の接続表現の意味の違いや使用例を説明した。説明時は、前者は順番が決まっている場合、後者は順番が決まっていない場合とした。石黒（2005）の研究では、「まず」「次に」等の接続表現は順番が決まっている、決まっていないという両方に使用できることが指摘されている。しかし、授業で対象とする中級入門期の学習者には、どちらでも使用できるといった応用範囲を広げた説明をすると、「まず」「次に」等しか使わなくなることがある。

そこで、列挙の接続表現を学習する最初の段階として、接続表現の基底にある意味の違いを理解してもらうため、「まず」「次に」等は順番が決まっているものを列挙する場合のみを教えることにした。「まず」「次に」等は順番が変えられない手順を示した例を挙げた。例えば、料理の手順やコンピューターのような機械操作の手順などである。一方、「第一に」「第二に」等の接続表現は順番が決まっていなくてもいいものを列挙する場合に使うように説明し、複数の理由や提案などを述べる例を示した。

表1の作文⑥「グラフを読む」の課題作文では、グラフから読み取った事実に関して推論や考察を行うことが求められる。課題作文を書くのに必要な推論や考察などに関わる意見の表現の説明が教材には不足していたので、友松（2008）の作文教科書の意見の表現に従って説明を補足した。「と思う」という文末表現しか意見の表現として使用しない傾向があり、まずは複数の意見の表現を紹介した上で、文作成をする練習を行った。課題作文では学習者は「～と思う」以外の意見の表現として、「～と思われる」「～を考える」「～と考えられる」「～のではないだろうか」「～が重要だ」「～だろう」などの文末表現を使うようになった。しかし、それぞれの意見の表現を作文の中で使い分けるまで

は至らず、誤用も頻出した。意見の表現の使い分けは中級入門期の学習者にはかなり難しく、定義を示して短文作成をするという練習以外に、説明や練習方法の改善が必要だった。

3.3 授業実践と並行した教材改訂 2018年度

2018年度の授業では、1限と3限の授業をそれぞれ担当しながら、教材改訂を行った。毎回授業後にメールで授業報告をして教材の使用状況を確認し、授業活動に連動した教材構成の明確化を行った。教材構成について、「アイデア→アウトライン→作文ルール→作文フィードバック」という4つの活動の流れで授業を行う形式が定まった。ただし、このような活動の順番が定着する過程では、アウトラインと作文ルールの順番を変える、アウトラインの活動と作文ルールの説明の区別をはっきり分ける、といった変更を授業と同時にを行った。

作文④「習慣の違い」(出版した教材では作文④「私の『普通』とあなたの『普通』」に改変)では、中心文と支持文についてアウトライン作成を学習者同士で話し合いながら行った。アイデアを出し合ってアウトラインを話し合いながら作成していく。しかし、授業では中心文と支持文の定義を理解して具体的にどのような文を指すのかが理解できずに適当にアウトラインを作成していく学習者が多かった。そこで、次の学期ではアウトライン作成の前に、作文ルールとして中心文と支持文の説明と例を学習者に提示し、その後でアウトライン作成の話し合いを行った。これらの結果を教材改訂に反映させた。

3.4 教材出版に向けた改訂 2019年度

2019年度の授業では教材出版が決まったことを受けて、特定の授業に使用を限定した自作教材から、中級入門期の学習者対象に400字程度の作文を書けるようになるという目標で使用できる汎用性の高い教材にするために、改訂を行った。改訂では出版教材とするための編集作業を重視した。

読みやすさに配慮した修正には出版社の編集担当者の助言が大変参考になった。授業で行ってきた具体的な活動や説明が他の学習者や教師に通じるようにするにはどの部分をどのように修正したらよいかを編集という客観視できる立場から助言してもらえた。助言に従い、教材構成の明確化に加え、授業活動で行っていた補足説明や活動の一部も教材に組み込んだ。口頭で説明していた列挙の接続表現や意見の表現などの作文ルールの補足は、明確な形で教材に反映するようにした。また、絵記号による指示の明確化や図表による視覚化などが読者である学習者や教師により理解しやすいように修正した。

表2 出版教材に基づく授業スケジュールと内容(杉浦・木戸2020参照)

回	内容	内容の説明【作文の種類・目的】
1	オリエンテーション 力だめし作文「作文学習の目的」	現在の作文の力を知るために、辞書なし、20分で作文を書く。
2	第1課「私を表す漢字」作文① ■ルール1. 「です・ます体」ではなく「普通体」で書く	・漢字一字を選んで自分を表現する。 ・クラスメイトを知る。 ・理由を話す・言葉を増やす 【自己紹介の作文】
3	宿題F B 第2課「私のおすすめ」作文② ■ルール2. 「話し言葉」ではなく「書き言葉」で書く	・「おすすめのランチ」「元気が出ないときにおすすめの場所」「小確幸」(村上春樹の小説から)の3つから1つを選んで書く。 ・説明する・質問して話を広げる。 【説明する】
4	宿題F B 第3課「留学の準備」作文③ ■ルール3. 原稿用紙の使い方 ■ルール4. 接続語を使う	・留学という共通体験について話し合う。苦労したこと/面白かったことを共有する。 ・言葉を増やす 【順番に気をつけて書く】 【書く形式を知る】
5	宿題F B 第4課「私の『普通』とあなたの『普通』」作文④ ■ルール5. アウトライン(構成)を考える -段落・中心文・支持文	・違う考え方を知る。 ・意見を主張する。 ・比べて話す・深く考える。 【比較する】 【中心文と指示文を明確に書く】
6	宿題F B 第5課「朝型か、夜型か」作文⑤ ■ルール6. 意見を論理的に述べる	・みんなのできるだけたくさんアイデアを出す。 ・意見を話す・反対の立場になって考える。 【理由と具体例を述べる】 【客観的に書く】
7	宿題F B 第6課「グラフを読む・グラフを書く」作文⑥ ■ルール7. グラフを説明する表現	・グラフへの苦手意識をなくすため、自分自身についてグラフにして説明してみる。「日本語の力の変化」「私の頭の中」 ・グラフに慣れる。 【グラフの表現を知る】
8	宿題F B 第7課「グラフを読む・意見を述べる」作文⑦ ■ルール8. 意見を表す表現 ■ルール9. 道しるべ文を使う	・複雑なグラフを読み解き、説明する。 ・それについて深く考え、意見を述べる。 【意見述べの表現を使う】
9	復習 テスト練習 作文集を作ろう 力だめし作文(もう一度)	・話し言葉を書き言葉に変える練習をする。 ・総復習をする。
10	期末テスト 作文集	・テストで学習成果を確認する。

3.5 オンライン授業での使用 2020年度

2020年度はコロナ感染予防のため、日本語コースの全授業がオンライン授業実施となった。春学期を終了し、受講者の授業評価も集計が終わったが、ほぼ対面授業と同じ授業活動や内容を実施でき、学習効果もほぼ同じであった。ただし、オンライン授業な

らではの工夫が求められることもあった。2020 年度春学期木曜 3 限について授業スケジュールと内容の変更点を以下に示す。

表 3 2020 年度春学期の授業スケジュールと内容（シラバスより転載）

回	授業内容	内容の説明【作文の種類・目的】
9	復習 テスト練習 作文集を作ろう（実施しない） 力だめし作文（もう一度）	・話し言葉を書き言葉に変える練習をする。 ・総復習をする。
10	期末テスト（評価には含めない） 作文集（実施しない）	・テストで学習成果を確認する。 ※授業回 1～8 は表 2 と同じ。

学習者 6 名が受講し、出席状況も良好だった。コロナ禍にあって外出が制限され、勉強するしかないからと苦笑する学習者の複雑な表情が印象に残った。

授業はすべて Zoom を使用してのオンライン授業となった。毎回授業前にテキストを manaba（大学指定の学習管理システム）にアップし、学習者が事前に内容を自習できるようにした。オンライン授業でも対面授業と手順は大きくは変わらず、フィードバック→アイデア探し（＝おしゃべり）とアウトライン→作文ルールの順に行った。アイデア探しはブレイクアウトルームの機能を使って 2 人、または 3 人のグループに分かれ、十分に話せるように留意した。教師は各ルームを回って様子を見たり、話題に参加したりした。最初はぎこちなかったおしゃべりも、回を重ね、お互いに知り合ううちに、制限時間では終わらないほど楽しむようになった。この点は対面授業とほとんど変わりがなかった。

当初は同期の時間が長いと学習者の負担が増すのではないかと危惧したが、「おしゃべり」を楽しみ、フィードバックを丁寧に行っているうちに 75 分すべて同期で行うようになっていた。実際に作文を書くのは授業以外の時間に行い、提出は manaba に出すこととし、添削も manaba で返すようにした。

結果、対面授業とほぼ同内容の授業を行うことができた。フィードバックでおすすめ作文を提示するのも Zoom の文書共有を使うとかえって簡便だった。

対面授業と異なったのは、期末テストは行うが、点数を評価に含めないことと、作文集を作成しないことの 2 点だった。不慣れなオンライン授業での負担軽減を図ったためだが、学期が進み、授業の仕方に慣れてくれば従来同様に行うことも可能だったと考える。

オンライン授業で学習者間の話し合いを良好にするために、以下について協力を求めた。

- ① 画面上に出る名前は、授業中に呼ばれた名前を読みやすい表記で書く。
- ② 表情から読み取れる情報は多いので、できるだけ「顔出し」してほしい。事情

のあるときは「顔出し休み」も可能。

- ③ 発言する際は挙手する。声が重なると話し合いが難しくなるため。
- ④ 質問して答えてもらったら、「わかりました、ありがとう」と反応を返す。

4. 授業実践を教材化するための留意点

授業実践において行った授業活動を1冊の教材として出版するにあたり、授業で口頭および補足資料とした説明や活動を教材化する必要があった。

各課の導入部の「アイデア探し」において、「おしゃべりを楽しむ」ことは口頭で教師が説明していたが、出版教材では、サクさんとブンさんという2人の学習者のイラストと会話によって「おしゃべりを楽しむ」活動を可視化し、楽しそうな雰囲気を出した。黙々と作文を書くという作文授業に対するピリーフを変え、作文を楽しむことを教師や学習者に理解しやすいように工夫した。

また、「作文ルール」では授業で補助教材としてパワーポイント資料を見せたり、コピー教材を配布したりして説明や練習問題を補足していた。それらの補助教材を授業活動の中に「作文ルール」として各課で学べるようにした。列挙の接続語、順接と逆接の接続語、指示語、文末の意見の表現がそれに当たる。

なお、「作文ルール」の説明は各課の「作文ルール」と巻末「もっと作文ルール」の2つに掲載ページを分けた。本教材の中心は学習者同士の会話を通して作文学習を進めることのため、「作文ルール」の説明より、アイデア探しやアウトライン作成、フィードバックにおけるペア・グループ活動を重視している。「作文ルール」を最小限にすることにより、協働学習が円滑に進められる。

5. 協働学習における「学習の安心保障」の重要性

授業において協働学習を機能させるには、学習者が緊張や気兼ねなく、安心して授業に参加して能力を発揮できることや、良好な学習者同士の関係性の中でお互いを尊重し、安心して発言できることといった、いわば「学習の安心保障」が担保されなければならない。それを実現するためには、授業内容や方法について納得できる丁寧な説明がなされることと、疑問や違和感のあるときには解決のための対話を重ねることが必要になる。

授業に疑問を感じて学習が滞ることや、協働学習に不慣れなために「おしゃべり」が弾まないなど、教師の期待したように進まないことも予想される。その都度、教師はなぜ、何のためにこの活動をしているのかを説明し、改善策を提案し、真摯に協力を求めることが肝要だろう。成績など教師の強権発動といった「武力」を用いるのではなく、冷静に「対話」を重ねることで問題解決を図ることができ、同時に、そのような態度がさらに「学習の安心保障」を強めることにつながるのではないか。

一例を挙げたい。挨拶表現の中で同性同士の身体接触がどの程度行われるかというトピックについて取り上げた際、同性愛について揶揄するような発言をした学習者があった。その発言によって、同性愛について異論を出しにくい状況が生じる恐れがあり、「学習の安心保障」が担保されない事態にもなりかねない。そこで、授業の進行を中断して、世界では同性愛についてどのような考え方やニュースがあるか全員で話し合った。犯罪として刑罰の対象になる国（地域）もあれば、法的な婚姻が認められている国（地域）もある。様々なバリエーションを知ることで、揶揄する発言をした学習者も自分の考え方を客観視する機会にしてくれたれば嬉しいとコメントして、授業に戻った。このような話し合いによって、学習者同士は意見の相違は認めつつ、感情的なしこりを長引かせることなく、安心して発言する場を保障される。このようなことが「学習の安心保障」につながると考える。

従来、授業には政治や宗教、性的なことを持ち込むと言われてきたが、現実社会を生きる生身の人間として、「考える意義のある作文の題」からこれらを排除することは難しい。であれば、これらを取り入れることにし、問題が起こった際の対処の方法までも事前に検討しておくことが必要だろう。さらに言えば、問題が表面化したときこそが大いに「考える」チャンスとなる。そこを冷静に捉え、「対話」に結びつけたい。

このような「学習の安心保障」が担保されれば、おしゃべりが弾むこと、すなわち、互いの意見や違いに耳を傾け、考えを共有し、深く思考した結果としての質の高い「作文」を期待することができる。

6. おわりに

以上、中級入門期の学習者を対象とする作文授業から出発した教材開発について、教材開発の動機、および、授業実践の中で行ってきた教材開発の経緯を述べた。本教材においては、作文を苦手とする学習者が作文を楽しむという活動を通して作文を好きになり、意欲的かつ主体的に作文に取り組めるように考えて教材開発を行った。「楽しむ」活動では、協働学習によって自分以外の他者とともにアイデアを出し合い、アウトライン作成、作文ルール理解、学習者同士の作文フィードバックを行うことを取り入れた。これらの活動の前提には、作文授業の場で学習者同士が自分の意見を率直に出し合い、異なる意見も尊重し合うという「学習の安心保障」が確保されていることが重要である。

この作文教材の開発では、教材作成を通して従来の作文の授業と異なる協働学習の方法を提示した。作文授業で行った協働学習や「楽しむ」という学習態度を尊重した活動が作文教材を通して実現される。本稿で行った教材開発は、学習のための資源を作成することを通して学習自体の提案を行うものである。

参考文献

- 石黒圭 (2005) 「序列を表す接続語と順序性の有無」『日本語教育』125：47-56
- 杉浦千里・木戸光子 (2020) 『おしゃべりしながら書くことを楽しむ中級作文』凡人社
- 友松悦子 (2008) 『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク